

## 講演概要

### 「老いの力」

ハブ ヒロシ

(アーティスト / 京都大学 大学院医学研究科 社会疫学分野特定助教 / NPO 法人丹田呼吸法普及会 理事長)

今日のように寿命が大幅に延びている社会では、老年期をいかに生きるかが重要なテーマとなっています。そのような中、老いに対する認識は、個々の人生のみならず、社会の制度設計にも影響を及ぼしています。しばしば、老いは否定的に考えられていますが、その見方が社会に反映されることで、高齢者の生が矮小化されてしまうことは考えられないでしょうか？生産性や効率といった一元的な価値から見れば、老いは否定的に見えるかもしれません。しかし、老いることは、果たしてネガティブなものでしょうか？

最も古い文学作品とされる『ギルガメシュ叙事詩』や『竹取物語』には、人類の積年の夢である不老不死が描かれています。これは現代におけるアンチエイジングの人気にも通じており、それは人間として自然な願望です。その一方で、仏教では、老いは避けることのできない苦として説かれています。仏教学者の中村元氏は「苦とは思ひ通りにならぬこと」と述べていますが、ブッダは、老いを受け入れ、執着を手放し、諦める（明らかにする）ことで、苦を乗り越えていく道を示しました。アーティストの赤瀬川原平氏の「老人力」という発想も、この姿勢と通じます。彼は、物忘れや衰えを「老人力」と呼び、こだわりから自由になる力として肯定しました。

芸能の世界においては、しばしば老いは大きな価値を帯びます。日本舞踊の世界では、若くして師範になっても「まだ若い」と言われ、味が出るには更に数十年必要と諭されることがあります。老いは高次に至る過程であり、真の名人となるためには、老いる力が不可欠なのです。能楽の世阿弥もまた、「若さに頼った花は真の花ではなく、老いてもなお咲く花こそ真の花である」と述べています。

養父市で取り組まれている、社会的処方などのケアの実践と、老いを結びつけ、さらに深めていくために、贈与という概念を参考にすることができます。贈与は、商品経済のような等価交換とは異なり、あらゆる物や時間や行為を贈り合うことで、信頼や友情など、「かえがたき」関係性を創造していきます。これは、贈る側が見返りを求めず、受け取る側が、与えられたと気づいたときに初めて成立します。この贈与の営みがケアにほかなりません。ケアにまつわる古典である貝原益軒の『養生訓』では、「人の身体は天地と父母から授かった贈り物だから、これを大切にすることが養生である」と説かれています。

Culture (文化) の語源 colere には、「世界を愛情深くケアする」という意味があります。文化的領域において、老いが肯定的に語られてきたのは、「ケアし/される」存在である人間

の弱さの中にこそ、真善美が宿ると考えられてきたからです。

本講演では、何か答えを提供するというのではなく、「老いの力」という問いを、参加者の皆さまに持ち帰っていただくことを目指しました。本講演が、少しでも、自身が望むかけがえのない老いを創造していく一助となれば幸いです。